

今里家 住宅調査報告書

福岡県八女市本町所在 今里家住宅調査報告書



2006年3月

八女市教育委員会

ごあいさつ

八女市教育委員会教育長 中島清志

八女福島伝統的建造物群は平成14年に国の選定を受け、現在、各機関の指導助言をいただきながら修理事業を進めております。

今回の調査は保存地区の中でも八女福島を代表する町屋である今里家について、今後の保存活用を目的として調査を実施いたしました。実施に当たっては当市の文化財専門委員会委員で、久留米工業大学教授大森洋子先生を中心に、九州大学教授宮本雅明先生をはじめ多くのスタッフの協力を得ることができました。

また、町屋の所有者である今里亨様には、調査当初から多大なご理解とご協力をいただき、心から感謝いたしております。なお、本書が町並みの保存活用に役立つことを祈念しお礼の挨拶といたします。



目次

1. はじめに	3
2. 八女福島町の町並みと今里家	4
2-1 八女福島の概要	4
2-2 今里家	4
3. 今里家住宅の現況	4
3-1 外観	5
(1) 主屋	5
(2) 離れ	5
3-2 軸組と平面構成	5
(1) 主屋	5
(2) ザシキ意匠	6
(3) 離れ	6
4. 今里家住宅の変遷	6
(1) 1階正面開口部とファサード	7
(2) 1階オモテドマ周りの改造	7
(3) チャノマの開口部	8
(4) ブツマとイマの開口部	8
(5) トオリドマとオクノマ周辺	8
(6) ザシキの床の間周辺	8
(7) 縁側	8
(8) 2階正面の部屋の開口部と小屋裏	8
5. 今里家住宅の復原	9
6. 今里家住宅の建築的価値	9
【参考文献】	10
【図版・写真目録】	10
【写真】	11
【図面】	19

1. はじめに

福岡県八女市大字本町字東古松町 240 番地 1 に所在する今里家は、町家の伝統家屋が並ぶ八女福島伝統的建造物群保存地区の中央よりやや西に、旧往還道に南面して建つ町家建築である。

この八女福島の町並みと伝統家屋については、平成8～9年度に実施された九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学研究院）宮本研究室を中心とした伝統的建造物群保存対策調査により本格的な学術調査が実施され、町並みや町家の履歴とその特徴が報告書にまとめられている。今里家についても主屋の復原平面図と断面図が掲載され、八女福島の町家の特徴である「居蔵^{いぐら}」と呼ばれる白壁土蔵造の最初の建物であり、天保9年の建設であることが記述されている。

本調査は、その八女福島を代表する町家である

今里家について、報告書を参考にしつつより詳細な建築的特徴を把握し今後の保存活用の基礎資料とすることを目的に、学術調査を実施した。現状の配置図・平面図・断面図・立面図の採取と実測調査を行いこれらの図面を作製し、さらに痕跡の採取と復原平面図・復原立面図の作製、写真撮影、来歴の聴聞を行って建築形式の変遷と価値の所在を把握した。ただ、今日までの様々な修理や改築については詳細まで確認できない部分もあり、それについては今後行われるであろう解体修理に伴う詳細な調査に譲り、現状把握に努めた。

調査は八女市教育委員会から依託を受け、久留米工業大学建築・設備工学科教授大森洋子が代表として担当した。なお、本調査は平成17年6月～10月に実施し、18年2月に補足調査を行った。調査に際しては、九州大学芸術工学研究院宮本雅明

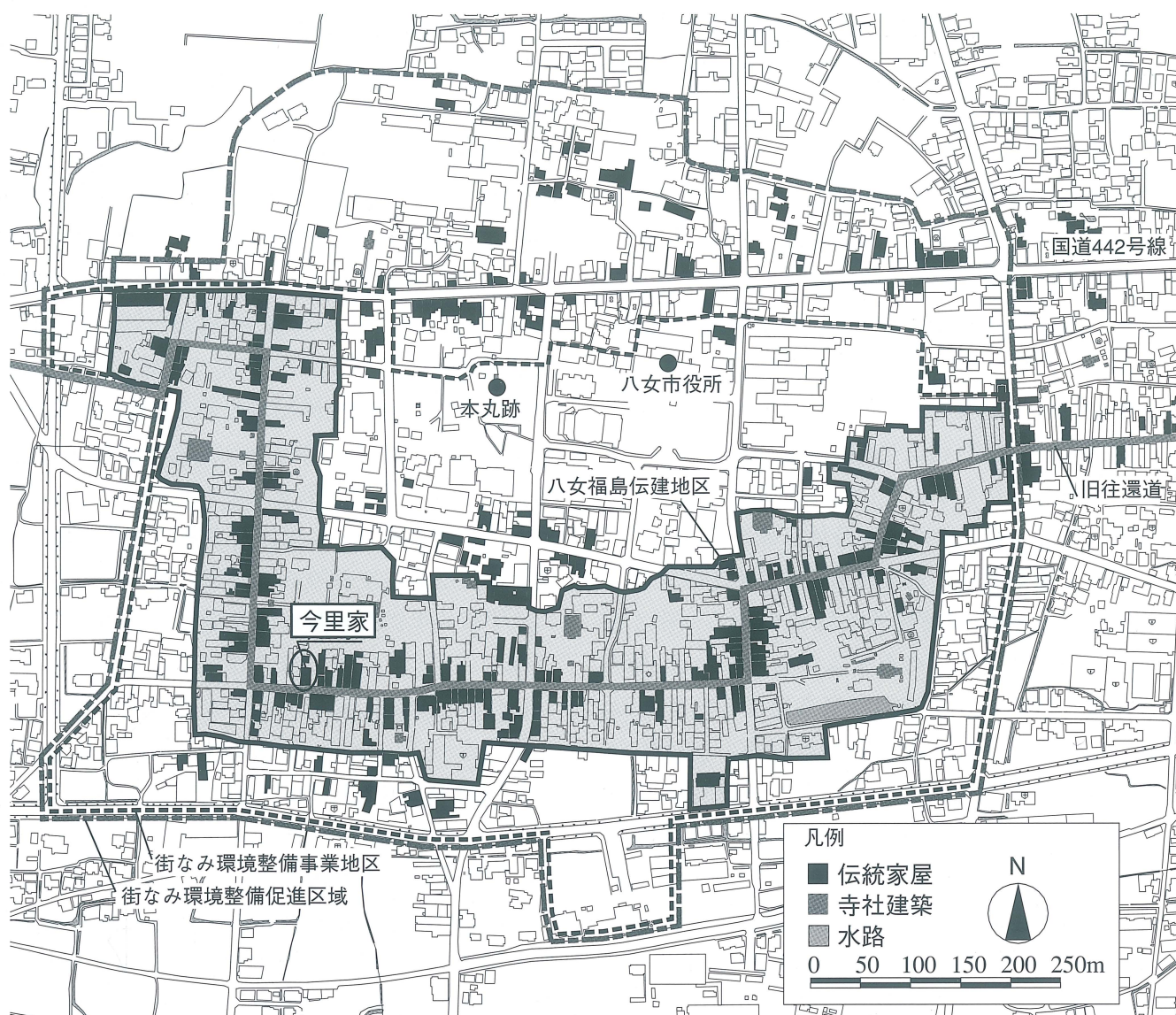


図1 八女福島伝統的建造物群保存地区と今里家の位置図

教授の指導と久留米工業大学大学院生白瀬亮、学部生沢津橋太一、永寫義紀、山崎翔平、大森設計室大森久司、古賀義朋、西原茂俊、中島建築アトリエ中島孝行、大工中島昌の各氏の協力を得た。文献・資料調査に際しては、八女市教育委員会の赤崎敏男氏の協力を得た。

報告書本文の執筆は大森洋子が担当し宮本教授の助言を得た。図版は白瀬亮と古賀義朋、西原茂俊が作製し編集は大森洋子が担当した。

なお、図面に書いている通り番号は、説明のために便宜上つけたもので、建物本来の通り番号は今回の調査では確認できなかった。

2. 八女福島町の町並みと今里家

2-1 八女福島の概要

八女市は、福岡県南部に位置する人口約4万人の小都市である。北を広川丘陵、東を八女山地、南を筑肥山地に囲まれた盆地型地形をなし、南辺の市域境を矢部川が流れる。丘陵地には茶畑や果樹園が広がり、平地では早くから灌漑によって水田開発が進み、歴史的集落が点在する。市中心部に位置する八女福島の周辺には弥生時代から集落が存在し、古代の条里制の痕跡も見られる。この八女福島地区には17世紀初頭、城下町が築かれたが、十数年で廃城となり、城下町の構成を残しつつも在方町として発展した。旧外堀は用水路として使われ続け、現在もよく残っている。

八女福島伝統的建造物群保存地区は、かつての城の南側を取りまくように走る旧往還道に沿って設定されており、主に江戸時代末期から明治時代にかけて建築された白壁土蔵造の入母屋2階建て妻入りの伝統町家が数多く残っている（図1参照）。一部には平入りの町家も混在している。昭和になると軽快な真壁造の町家も建てられている。町家の主要をなす居蔵造の正面外観は、主屋の両側に袖下屋を架け下ろす形式になっていることが八女福島の特徴である。また、隣家との空間を両側から使用して共有する「もやい壁」も特徴である。保存計画では、519件の伝統的建造物（建築物174、工作物345）と133件の環境物件が特定されている。

こうした地勢と歴史を背景に、中世に起源を持

つといわれる手漉き和紙、石灯籠、近世に始まる仏壇、提灯といった多様な手工業が産業基盤として発展し、今もなお伝統的町家を工場として受け継ぐものも多い。それらの伝統産業の職人町は線状に伸びる町並みの西側半分に位置し、東側は農産物の加工品や日用品などの店舗が並ぶ商家町であった。この町の性格は現在でも継承されている。今里家住宅はその町並の西側の東古松町に位置している。

2-2 今里家

居蔵造の今里家住宅の最初の所有者であった小和田和助は、『八女福島伝統的建造物群保存対策調査報告書』によると、「小和田和助保房は米・太物を皮切りとして和紙・生蠟を商って成功を収めた商人で、宮野町八幡宮の楼門・堀の造営、各地の石橋の架橋にも寄進したことでその名が知られ、土蔵造の町家を建て始めるにふさわしい活躍を示した商人で、この居蔵造の建物は三男半助が居住して質屋を営んだ」とあり、かなりの豪商であった。大正期には西側敷地も取得し、そこに建っていた家屋と繋ぐ為の改造をすると共に、裏に離れを増築したと考えられる。西側敷地にも離れや土蔵が建っていた。その後昭和初期に提灯の房の製造・卸を営んでいた今里家が買い取り、主屋は店舗兼住宅として平成7年まで使われていた。西隣の家屋に台所や風呂場を置き、廊下で繋いでいたため、主屋には水回りの部屋がなかった。離れは借家として貸し出されていたが、そこに設置されていた便所は、今里家と共有で使用されていた。また西側敷地の離れも借家として使われていた。平成6年に西側敷地の家屋と離れおよび土蔵は除却され、奥に今里家の住宅が新築された。それに伴いそれまで住まれていた主屋と離れは空き家となっているが、祭やイベントの時には会場として利用されている。

3. 今里家住宅の現況

今里家住宅は東古松町の旧往還道に南面して主屋を構え、その北側に中庭を挟んで離れが建つ。敷地東側には細い路地が走っている。北隣に平成7年に新築された住宅が建てられ、西隣は今里家

の駐車場と庭になっており、今回調査対象の主屋や離れの建つ敷地とは塀や生垣で仕切られている。

3-1 外観

(1) 主屋

主屋は2階軒が低い木造中2階建妻入り、屋根の正面は入母屋、裏は切り妻の棧瓦葺、東側に1.2間、西側に0.9間の棧瓦葺の袖下屋を架け下ろす居蔵造である。棟には波模様の鬼瓦が飾られている。上屋は梁間3間、桁行8間で、正面も裏側にも約半間の棧瓦葺の下屋を下ろす。西側の袖下屋は正面から2間奥に入ったところで9.5寸高くなっている。これは正面2階の意匠を左右対称とするために両側の袖下屋の高さを揃えたが、東側の袖下屋内部は通り土間で天井を張っていないのに対し、西側は奥に床の間があり天井を水平に張るために軒を高くせざるを得なかったからである。他の福島居蔵造でも、上屋の奥では梁間4間であっても正面は梁間3間として両袖下屋を架け下ろすなどの正面意匠へのこだわりが見られる。正面下屋の軒桁を支える持ち送り板には鬼瓦と同様に波模様の彫刻を施すなど、火事に備える水のイメージを強く表している。

外壁は2階も1階も大壁造で、裏側の下屋庇の軒裏のみは垂木現しになっているが、他は1階の下屋庇の軒裏までも白漆喰を塗込めている。さらに2階の正面を除く3方の窓と1階東側の窓に土戸を設け、防火性能を高めた造になっている。火事が最も大きな災害であったことが読みとれる。側面の腰壁には青石（緑泥片岩）が漆喰に埋め込むように張られている。1階正面の左右の端に僅かに残る下屋庇柱筋は大壁であるが、内側の上屋筋の外壁は真壁造で腰壁は人造石塗洗い出し仕上げになっている。

正面2階には左右対称に幅半間の縦長の単窓を2ヶ所に穿ち、木製の両開きガラス戸を設けている。正面1階は1間の出入り口とその西隣の掃き出し窓に引き違いの木製ガラス戸を建て、他の窓は外側に木製格子を設け内側にガラス戸を建てている。2階の側面と裏側の窓は全て半間の幅で、外に鉄格子を嵌め内側に片引きの土戸を建

てている。1階の東側の窓は半間幅で外側に木製格子を建て、その内側に片引きの土戸と障子を建てている。北側の縁側部分は雨戸が引かれていたであろう1本の溝にガラス戸が建てられ、トオリドマ出入り口部分は内開きのガラス戸が、コドモベヤの窓は引き違いのガラス戸が建てられている。西側は縁側の掃き出し窓と出窓に引き違いのガラス戸が、店の間の半間の窓には両開きのガラス戸が建てられている。

(2) 離れ

主屋北側に中庭を挟んで約6間離れた位置に木造本2階建て真壁造の数寄屋風の離れが建つ。屋根は入母屋棧瓦葺、南側以外の3方に棧瓦葺の下屋を下ろす。棟は主屋と直行する方向にとられている。上屋は梁間2.75間、桁行き3.5間である。2階南と東面には1階外壁より張り出した縁側が回り、手摺りが設けられ、外側に雨戸が建てられている。2階北側には木手摺りの付いた出窓があり、同様に外に雨戸が建てられている。1階南側には円窓を穿ち、引き分けの障子が建てられている。東側は全て1間の引き違いのガラス戸の窓が設けられている。全体に傷みが激しく、外壁は白漆喰塗りであるが、一部はトタン板で補修され、建具もベニヤ板で応急措置が執られている。

壁のない1間幅の渡り廊下が主屋と離れを主屋の上手にあたる西端で繋ぐ。

3-2 軸組と平面構成

(1) 主屋

軸組は、「十」通りで、大きく分かれる。正面から「十」通りまでは、桁の上に三間梁をのせる京呂組で、中引梁を通し小屋束を2段の貫で繋いでいる。「十」通りから奥にかけては、小屋裏を物置として使用するために、側面の柱の上から地棟に登り梁を架けている。登り梁の勾配は屋根勾配と同じにし、登り梁には小屋束を建てずに直接母屋をのせ、桁も登り梁にのせて母屋を兼ねている。「七」通りには柱を2本建てその上に2段の天秤梁を架けて中間で地棟を支えている。柱は4.5寸角～5.6寸角の杉材、梁は松材を用いている。「十」通り「へ」の通し柱（以下、中柱と呼ぶ）のみは、直接棟木を支えている。

1階平面は、前面にオモテドマを設けて、東側を下手としてトオリドマを設け、それに沿って2列の部屋が並ぶ構成になっている。上手は奥から10帖のザシキ、6帖のブツマ、8帖のイマの3間が並び、中列は奥から7.5帖のオクノマ、10.5帖のチャノマの2間が並ぶ。7.5帖のオクノマは、トオリドマの先に6帖のコドモベヤを設けトオリドマを曲げて裏庭に通すため半間幅で削られ、狭くなっている。今里家が購入した昭和初期に、施主が鬼門に出入り口があるのは縁起が悪いと考え、北東の隅に部屋を設け土間を曲げて裏への出入り口を中央寄りに変更したと聞く。なおコドモベヤに流し台が置かれているのは、イベント開催時に水回りの設備がないと不便であるため空き家になった平成7年頃に設置されたもので、今里家が居住している頃は寝室や子供部屋として使用されていた。

ザシキとオクノマの先には半間幅の縁側が設けられている。オモテドマとイマは上部に部屋を設けるために天井が低く根太天井になっている。ザシキとブツマ、オクノマは棹縁天井になっている。チャノマのオモテドマに面する半間分は板張りで、西へ上る箱階段が置かれている。

トオリドマ改造前は東側袖下屋の下が全てトオリドマで、表から裏まで真っ直ぐに通る、天井を張らない小屋裏まで吹き抜けの伸びやかな空間であった。現在は奥に部屋ができ裏へ直線では抜けていないが、小屋裏の登り梁と垂木及び割竹の竹簀が見える吹き抜けの大きな空間は残っている。トオリドマに面するチャノマも吹き抜けとは言えないまでも高い根太天井の大きな空間である。

2階は、オモテドマ上部に12帖の広さのニカイマがあり、イマ上部もカイダンシツと物置にしているモノオキ1がある。ニカイマとカイダンシツは梁下部を見せながら石膏ボードの天井が張られ、壁もベニヤ板の大壁で仕上げられているが、これは近年張られたもので、昭和30年代までは壁は粗壁であった。このオモテドマとイマの上部以外は床が3.16尺高くなり、小屋裏を物置としているモノオキ2がある。そこへはモノオキ1から梯子段で上る。

(2) ザシキ意匠

ザシキは1.5間の床の間と狝潜りのある1間の床脇を備える。床脇には天袋、違い棚を設える。床の間の床框や床板、落掛、及び床脇の床框や床板、違い棚はケヤキ材が用いられている。釘隠のある長押をめぐらせ、繊細な模様の棧を持つ障子を嵌めた平書院やブツマとの境には黒漆杵素木透かし彫の欄間を設けるなど凝った意匠になっている。天井は棹縁天井で、壁仕上げは本来は白漆喰塗りであっただろうが、現在は京ジュラク風の繊維塗り壁となっている。

(3) 離れ

小屋裏が調査できなかったため小屋組の確認はできていないが、下屋庇の構造を見る限り、京呂組と考えられる。

1階の平面は、東側に8帖の和室、西に4帖のイタノマ、その北に3帖のスイジバと西に便所、南に階段がある。柱は主屋に比べ一回り小さい3.8寸角～4寸角の杉材を用いている。8帖の和室の天井は根太天井で、南面には円窓が嵌められ長押もなく数寄屋風の造りになっている。3帖のスイジバは、この建物が今里家の所有となった昭和初期に借家にするために増築されたものである。

2階は、東に6帖、西に4.5帖の二間があり、天井は棹縁天井である。6帖の和室の北面に奥行きが1.6尺と浅い1間の床の間と半間の床脇があり、西面の欄間も素木透かし彫りの瀟洒な造りである。東外側と南側には縁が回り木手摺りが設けられている。4.5帖の北面には出窓が設けられ、出窓の手前にガラス戸が建てられている。

4. 今里家住宅の変遷

現存する主屋建築遺構に残された痕跡から改造過程を辿ると、3期に大きく分かれる。先ず建設初期であるが、伝統的建造物群保存対策調査では、主屋2階中柱の墨書から建設は天保9年と言われているが、今回の調査でそれ以前に造られていた可能性もあることが分かった。墨書には

于時天保九戊戌歲閏四月二日吉方良辰を撰
棟上猶土蔵貳ヶ所小土蔵壹ヶ所」□建物

三ヶ所都而五ヶ所良辰を撰同月廿一日迄内
廿日内悉建小和田和助□□於福島市中居蔵
建始る此時保房六拾歳自書置ものなり」

と書かれており、施主の和助自身が天保9年のこの建築をもって福島町で居蔵造が建て始まったことを記しているが、その墨書は、中柱西面に貫を切り落とした上から書かれている。さらに墨書部分のみが新たに鉋がけされており、既存の中柱の一部に鉋をかけ墨書を記したと考えられる。このことから墨書が記された天保9年以前にこの建物は建てられていたこととなり、天保9年に居蔵造に改造されたと考えられる。それと共に、「十」通りより奥を物置として利用するために登り梁の小屋組に改造した可能性もある。「十」通りを境に東を貫でかためる小屋組から登り梁の小屋組へと全く異なっており、母屋や軒桁も「十」通りで継いである。また、モノオキ2への上り口にある中柱より西の登り梁は、付け替えられた痕跡がある。この登り梁だけが東を建てているが、東は貫穴の痕跡があり下部が登り梁に差し入れるために不自然に切られている。東の貫穴をたどると中柱西面の切られている貫と一致する。おそらく「十」の「と」通りにも柱を建て貫で繋いでいたか、あるいは中柱から西へも東と同じように上屋梁を設けていたが、奥の小屋組を登り梁にして物置として利用する際に、上がり口を設けるために邪魔になる貫あるいは梁を切り落とし、登り梁に替えたと考えられる。その際に貫を切り落とした中柱西面に前述のような天保9年の墨書を記したと考えられる。しかし、貫跡は確認できたが、上屋梁の痕跡は確認できなかった。また、建設初期の年代を特定できる手掛かりも得られなかった。ただ、中柱北面にも墨書があり、薄板が角釘で打ち付けられており一部しか見えず全体を読むことができなかったが、これを剥がせば新たな手掛かりが得られるかもしれない。従って現在のところ天保9年以前の建築状況についてはどのようなになっていたか分からない。それ以降はモノオキ1と2の改造は行われず、窓も鉄格子の内側に片引きの土戸を建てる伝統的なものが残っている。

建設2期が上記のモノオキ2の小屋組の改造お

よび居蔵造への改造が行われたであろう天保9年であり、現在の建物の原型がこの時期に形成された。

3期目が、西隣を併合し離れを建てた大正期から、小和田家より今里家へ所有権が移った昭和初期である。外観の変更は殆どないが、表構えとトオリドマ、西隣や離れを繋ぐための廊下や縁の改造が行われている。なお、離れは建築された時期が大正時代であり主屋と大きく異なるため今回は痕跡調査は行っていない。

以下に、主屋の痕跡調査から明らかになった天保9年以降の改造を記す。

(1) 1階正面開口部とファサード

「ろ」の「十八」通りは現在2本の柱が不自然に並んでいるが、これは窓を改造した際に新たに西側の柱を付け足したもので、元の柱は東側の柱であり、その柱の西面には蔀戸の溝跡がある。しかし天井に吊り金具が見あたらないことから、下部の1枚の板戸をこの溝に落とし込み、上部に1枚の板戸を嵌め込んでいたと考えられる。更に隣の出入り口は天井に吊り金具跡があることから大戸があり、又その金具跡の位置と鴨居に柱跡があることから小壁が設けられており、「ほ」通り柱に残る板跡から板壁であったと考えられる。「ほ」通り柱西面と「と」通り柱東面には床高の蔀戸の溝跡があり、更に「と」通り柱西面と「り」通り柱東面にも床高の蔀戸の溝跡があり、天井に吊り金具跡がないことから、土間開口部と同様に2ヶ所とも下部は落とし込み板戸、上部は嵌め込み板戸であったと考えられる。

この通りは道路拡幅により軒切りをされている町家が多いが、今里家も東袖下屋と正面下屋は寄せ棟になっているにも拘わらず正面下屋の軒先の方が高くなっており、若干の軒切りがされたと考えられる。軒切り前は、他の町家から類推すると主屋柱筋から半間出た位置に下屋柱があり、両脇に壁があったと考えられる。

(2) 1階オモテドマ周りの改造

「ほ」の「十八」通りの柱北面に框跡があることから、オモテドマ上手にはミセノマとしての居室があり、更に「ぬ」の「十四」と「十八」通りの柱のオモテドマ面に小舞竹を留めた角釘

跡があることから、ここには壁があり奥にもう一室あったことが分かる。中央の柱で引き分ける板戸で出入りする納戸であったと考えられる。2室とも大引跡の高さから板張りであったことが分かる。オモテドマとイマの境の柱間も「へ」の「十四」通りと「り」の「十四」通り柱に角釘跡があり、無目鴨居であることから壁であったことが分かる。伝統的建造物群保存対策調査が行われた平成8年にはこれら2部屋がまだあり、その後改造されて土間になっている。

(3) チャノマの開口部

チャノマとトオリドマの間は、敷居も鴨居も2本溝があり引き違い戸が建てられていた。イマとの境は、「へ」通りの「十二」柱南面と「十四」柱北面に角釘跡があることから壁であったことが分かる。更に「十四」通りの天井長押に肘坪跡が2ヶ所あることから天井に突き上げ戸があり、2階への梯子段があったと考えられる。

(4) ブツマとイマの開口部

ブツマとイマの「ぬ」通りの鴨居は無目であることからこの部分には建具がなく、そこから約半間幅の現在のロウカと仏壇がある西側部分には板が張られ、家具を置くスペースとして用いられていたと考えられる。現在のロウカに開けられている開口部は、大正時代に西側敷地を取得し増築する際に開けられたもので本来は壁であった。また、ブツマとイマの境の柱間は、「十」通りの「ぬ」柱西面に小舞跡が、東面に角釘跡が、更に「り」と「ち」柱の東面と西面及び「へ」柱西面に角釘跡があることから、全て壁で仕切られていたことが分かった。

(5) トオリドマとオクノマ周辺

「は」通りの「五」柱南面と「七」柱北面に框跡があることから、トオリドマが直線で裏まで通り、オクノマは7.5帖の広さがあった。前述のヒアリングの結果と一致する。今里家の所有となった昭和の初期に現在の間取りに改造された。現在のコドモベヤ上部の袖下屋屋根には煙出しがあり、「七」通りには煙の拡散を防ぐ垂れ壁があることから、トオリドマの奥は煮炊きを行うスイジバであった。「は」通り「二」柱東面には一筋鴨居の跡があることから、裏庭への出入り

のための片引きの板戸を建てていたことが分かる。

オクノマ「二」通りの差鴨居には「ほ」通りの位置に柱跡があり、「へ」の柱東面に肘壺跡があることから、ここには縁に出るための外開戸があった。また、「二」通り「は」の柱西面には窓台跡と小舞跡及び格子の貫跡があることから、腰壁と窓があったことが分かった。窓は外に木格子を嵌め内側に引き違いの障子を建てていたと考えられる。ザシキとの境の柱間は、各柱の南面と北面に貫と小舞跡が残ることから、ザシキとは全て壁で仕切られていたことが分かった。又、トオリドマとの境の柱間は無目鴨居であることからここには建具は建てられていなかった。

(6) ザシキの床の間周辺

ザシキは前述のオクノマとの境の柱間装置が変わった以外は大きな改築は見られないが、狛潜りは床柱西面に貫跡があることから、本来壁であった部分に後で開けられたことが分かった。また落掛中央の床の間側たれ壁に切断された柱が残っており、狛潜りを設けた時期に床の間と床脇が改修された可能性がある。しかし、その年代を特定できる手がかりは得られなかった。

(7) 縁側

ザシキ北の縁側は、西端の桁下に柱跡があり、「る」通り「二」の柱北面に小舞跡があることから、西側は壁であったことが分かった。縁は、一筋の雨戸で戸締まりがされていた。「へ」通り「二」の柱東面に肘壺跡があることからここに開戸があったことが分かる。その開戸を開けると渡り廊下があったのではと考えられる。つまり、中庭の端ではなく中央に渡り廊下があった可能性がある。

(8) 2階正面の部屋の開口部と階段室

2階正面のニカイマ内部は現在全面被覆されているため痕跡を調べることはできなかったが、縦長の窓は、漆喰の窓枠に肘壺を掛ける金具が残っていることから、元は外開戸を外部に建て、内側に鉄格子と片引きの障子を建てていたと考えられる。肘壺を埋め込むのではなく、修理の際は取り外しできる外開戸であったことから、防火戸のような重たい扉ではなく、板戸であった可

能性が高い。

階段室の箱階段の上がり口である「へ」通り「十四」と「十五」の柱の向かい合う面には貫跡があり、壁であった。従って階段は現在と逆の東向きに、1階チャノマ上部の床が高くなったモノオキ2へ上っていたと考えられる。そして前述の様に「十五」通りのチャノマ天井長押に肘坪跡があることから1階天井面に突き上げ戸を設け、梯子段で上がっていたと考えられる。そうすると低い床のカイダンシツとニカイマには別の階段が必要になるが、その痕跡は今回は見つけられなかった。

5. 今里家住宅の復原

以上のことから、今里家住宅は天保9年に行われたであろう「十」通りより奥の小屋組の改造および居蔵造りへの改造後は、外観は正面と裏面の1階建具の変更及び、西面1階の開口部新設と若干の軒切り以外に大きな改変はなく、当時の姿をよく残していると言える。内部も、ミセノマが居室から土間に変わっていることと、トオリドマ奥にコドモベヤが新設されトオリドマが曲げられオクノマが狭くなったことや、各部屋の壁が開口に変わったこと以外は、基本的な間取りの変更も軸組の変更も行われず、当時の生活が偲ばれる。それらのことから、復原する際もこの建築をもって福島居蔵造の始まりとされた天保9年の造がふさわしいと考えられる。以上の痕跡調査を基にして天保9年当時の姿の平面と正面立面の復原図の作製を試みたが、今後の解体修理などの詳細な調査により新たな発見があれば復原図は当然変わってくるものである。

復原を試みた天保9年当時の今里家住宅の姿を記すと以下の通りになる。

外観は妻入りの入母屋造棧瓦葺（裏面は切り妻）で、両側に袖下屋を下ろし、正面と裏面にも下屋を下ろす。外壁は大壁造で白漆喰で軒裏まで塗り込め、側面の腰には青石（緑泥片岩）を張る。1階正面は下屋柱筋の両側に壁を設け腰には側面同様の青石を張る。

2階正面は縦長窓を左右対称に2カ所に穿ち、鉄格子を嵌め、内側に片引きの障子戸を建て外

側に外開戸を建てる。側面と裏面は現在も残っているように鉄格子を嵌め内側に片引きの土戸を建てる。

1階正面の主屋壁筋は、下手に土間高の蔀戸と大戸を建て、上手に床高の蔀戸を建てる。蔀戸は下部は落とし込みで上部は嵌め込み式であった。側面は現在見られるように、縦長窓に木格子を嵌め内側に片引きの土戸と障子戸を建てる。裏面は上手の縁側には雨戸を引き通し西端の戸袋に納め、中央付近に渡り廊下に通じる外開き戸を建てる。オクノマの腰壁高さの窓には外に木格子を建て内側に引き違いの障子を建てる。下手の土間部分には裏庭へ通じる片引きの板戸を建てる。

1階内部は下手である東側にトオリドマを設け、それに沿って中列は奥から7.5帖と10.5帖の部屋を設け、上手の列には奥から床の間のある10帖、物置のための板敷きスペースがある6帖と8帖の部屋を設け、表の間のみは上がり段付きの10帖の部屋と4帖の納戸が並ぶ間取りになっていた。

2階内部は表の12帖の部屋と6帖の物置があり、奥は床が1段高くなり、登り梁の小屋裏を物置として利用していた。墨書が記されている中柱は主屋の中央に位置する通し柱で、この柱のみが棟木を直接支えている。

6. 今里家住宅の建築的価値

これまでの検討から、以下の理由において今里家住宅は福島の町並みを構成する町家建築を代表する建物として評価できる。

- (1) 初期の建物の建設時期は分らないが、天保9年に居蔵造で建てられたことが中柱墨書に明記してある。初期の建物はこれより更に古い時期に建てられた可能性もあり、福島でも最も古い建物の一つである。
- (2) 福島の町並みの典型である袖下屋を持つ妻入り入母屋の居蔵造の最初の建物である。
- (3) 外観も内部も居蔵造になってからの改変が少なく当時の姿をよく留め、近年まで使用されていたため保存状態も良好である。特に側面には青石張りの腰壁や土戸を建てた開口部な

ど改変されることなく残っている。福島 of 建築の発展を知る上でも貴重な建物である。

- (4) 居蔵造の中でも梁間3間、間口5間と広い大型の町家で、当時の町並みの盛況を窺うことが出来る。
- (5) 下手の袖下屋内部はトオリドマで裏へ直線で通り抜け、さらに天井を張らずに登り梁の小屋裏まで吹き抜けた、福島の他の町家では見られない伸びやかな大らかな空間である。それに面したチャノマも吹き抜けではないが根太天井が高くとられた大きな空間である。その後の福島の町家に出現する吹き抜けの部屋を予感させる。
- (6) 表だけ入母屋で裏は切り妻の屋根という、切り妻から入母屋への移行期を感じさせる古めかしい形式である。

以上のような価値を有している今里家は軸組のひどい傷みもなく、福島の町家の特徴や町並みの歴史およびこれまでの福島の文化を展示・紹介する学習施設や町並みを訪れる人と地元住民の交流施設、休憩所、集会施設などに今後活用することが可能である。

【参考文献】

1. 八女市編纂専門員会編『八女市史上巻』、『八女市史上巻』、『八女市史年表編』（八女市、1992年）
2. 『八女福島伝統的建造物群保存対策調査報告書』（八女市教育委員会、1998年）

【図版・写真目録】

■図版（挿図）目録

図1 八女福島伝統的建造物群保存地区と今里家の位置

■図版（図面）目録

図面1	現況配置図	1/100
図面2	現況1階平面図	1/100
図面3	現況2階平面図	1/100
図面4	現況南立面図	1/50
図面5	現況東立面図	1/50
図面6	現況矩計図	1/30
図面7	痕跡1階平面図	1/75
図面8	痕跡2階平面図	1/75
図面9	復原1階平面図	1/100
図面10	復原2階平面図	1/100
図面11	復原南立面図	1/50

■写真目録

写真1	主屋正面
写真2	主屋東面

写真3	主屋北面
写真4	主屋西面
写真5	主屋北面縁側ガラス戸
写真6	主屋東面の煙出しと格子窓
写真7	主屋正面下屋の持ち送り
写真8	主屋2階正面窓の金具跡
写真9	主屋2階東面窓周り
写真10	主屋正面鬼瓦
写真11	1階東面窓
写真12	青石張りの腰壁
写真13	十四通り小屋組
写真14	十通り中柱より東の小屋組
写真15	掛け替えられたと考えられる十通りの登り梁
写真16	七通り小屋組
写真17	モノオキ2の小屋組
写真18	地棟に架けた登り梁
写真19	地棟の継ぎ手
写真20	登り梁と2階桁
写真21	直接棟木を載せている通し柱
写真22	オモテドマ西面
写真23	オモテドマから奥を見る
写真24	オクノマから表を見る
写真25	トオリドマから奥を見る
写真26	チャノマの箱階段
写真27	トオリドマ窓の土戸と障子
写真28	ブツマ西面
写真29	チャノマ西面
写真30	オクノマ西面
写真31	ザシキ床の間
写真32	ザシキ床脇
写真33	ザシキ南面
写真34	ザシキ東面と南面
写真35	ザシキ東面
写真36	ザシキ欄間
写真37	ザシキ床脇床下
写真38	コドモベヤ天井
写真39	イマ天井
写真40	2階ニカイマ内部
写真41	2階モノオキ2内部
写真42	2階モノオキ2窓 土戸を引き鉄格子を見る
写真43	1階正面開口部
写真44	2階中柱墨書
写真45	十通り東に残る貫跡
写真46	モノオキ2への梯子段
写真47	離れ北面
写真48	離れ西面
写真49	離れ南面
写真50	中庭
写真51	離れ1階8帖和室の天井
写真52	離れ1階8帖和室の円窓
写真53	離れ階段
写真54	離れ2階回り縁
写真55	離れ2階和室6帖の床の間と床脇
写真56	渡り廊下



写真1 主屋正面



写真2 主屋東面



写真3 主屋北面



写真4 主屋西面



写真5 主屋北面縁側ガラス戸



写真6 主屋東面の煙出しと格子窓



写真7 主屋正面下屋の持ち送り



写真8 主屋2階正面窓の金具跡

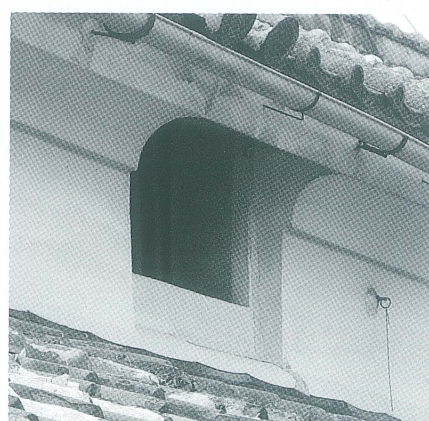


写真9 主屋2階東面窓周り



写真10 主屋正面鬼瓦

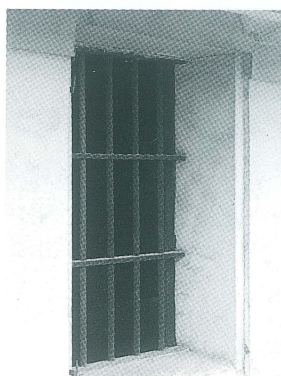


写真11 1階東面窓

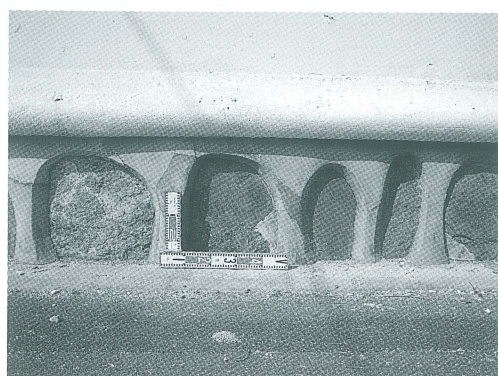


写真12 青石張りの腰壁

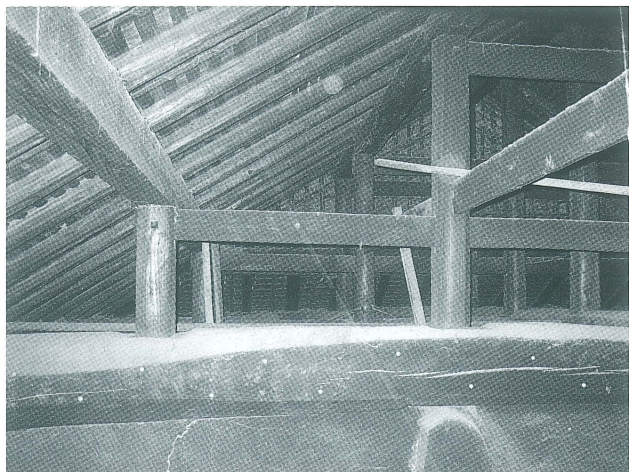


写真 13 十四通り小屋組

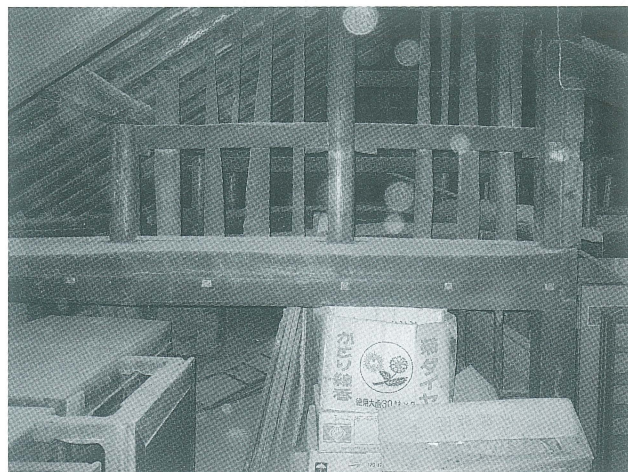


写真 14 十通り中柱より東の小屋組

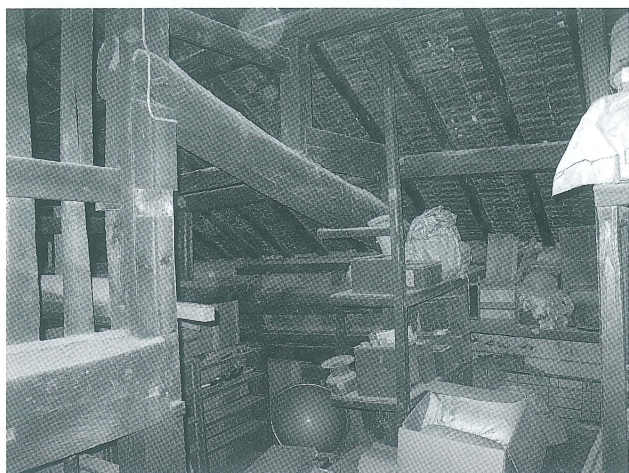


写真 15 架け替えられたと考えられる十通りの登り梁

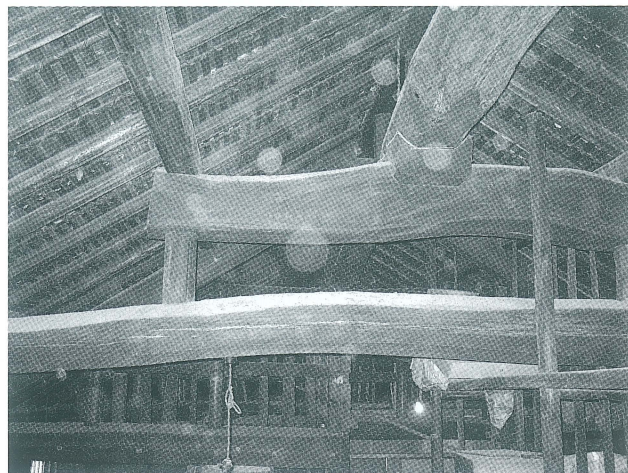


写真 16 七通り小屋組



写真 17 モノオキ2の小屋組



写真 18 地棟に架けた登り梁

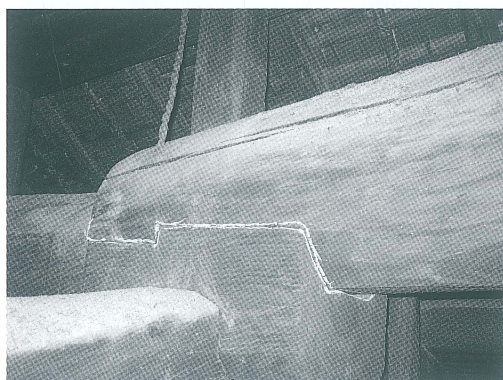


写真 19 地棟の継手

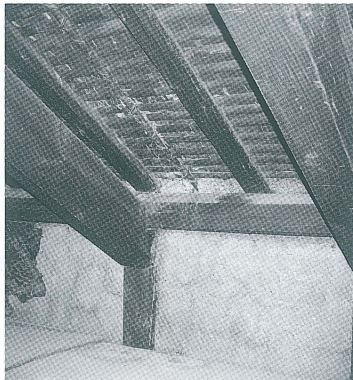


写真 20 登り梁と2階桁

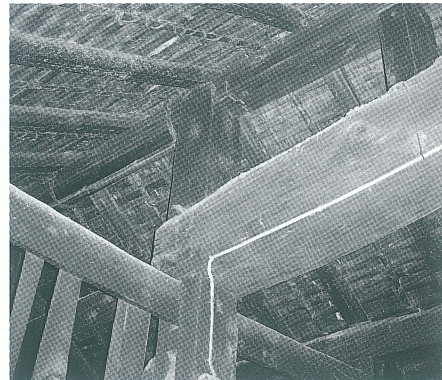


写真 21 直接棟木を載せている通し柱

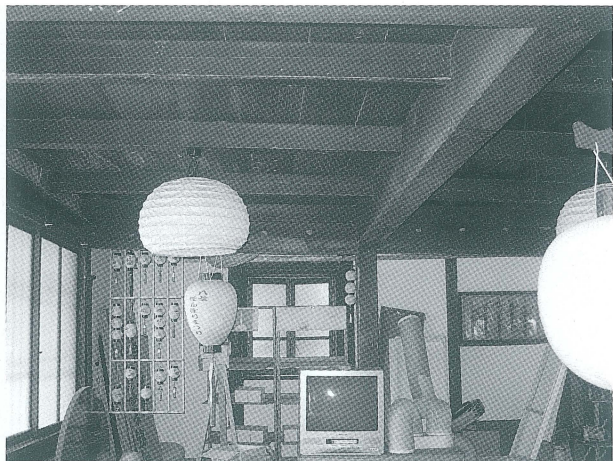


写真22 オモテドマ西面

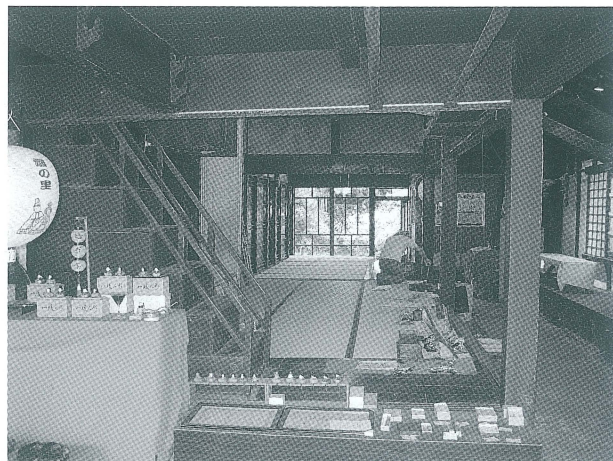


写真23 オモテドマから奥を見る



写真24 オクノマから表を見る



写真25 トオリドマから奥を見る



写真26 チャノマの箱階段



写真27 トオリドマ窓の土戸と障子

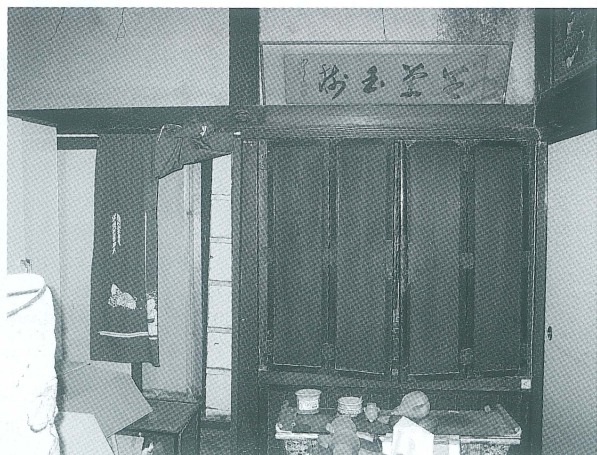


写真28 ブツマ西面

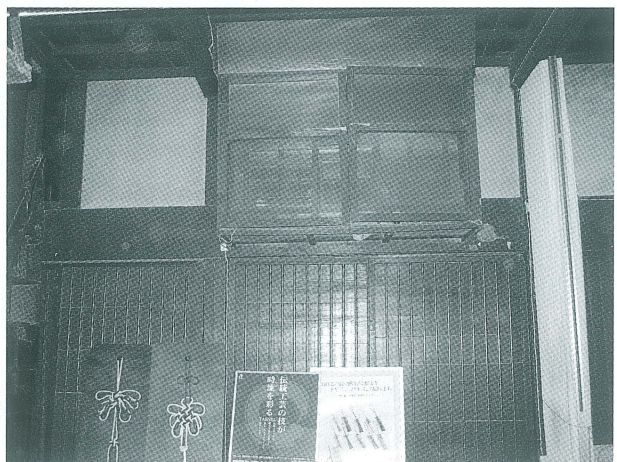


写真29 チャノマ西面

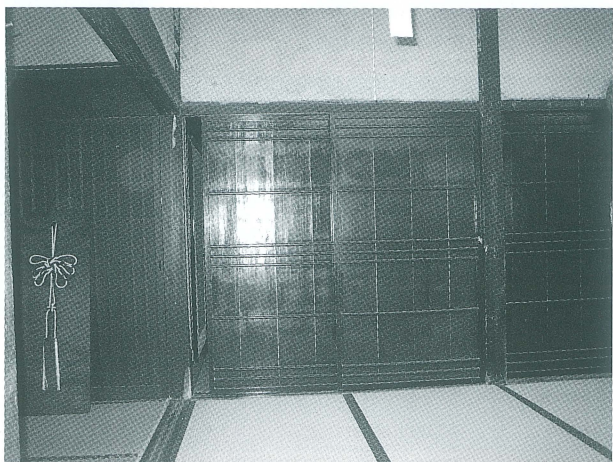


写真30 オクノマ西面

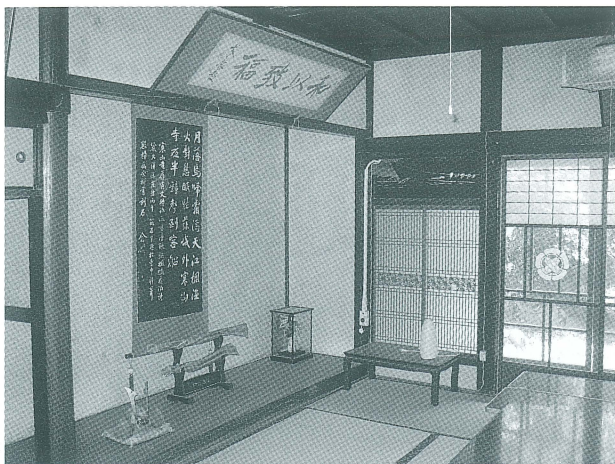


写真31 ザシキ床の間

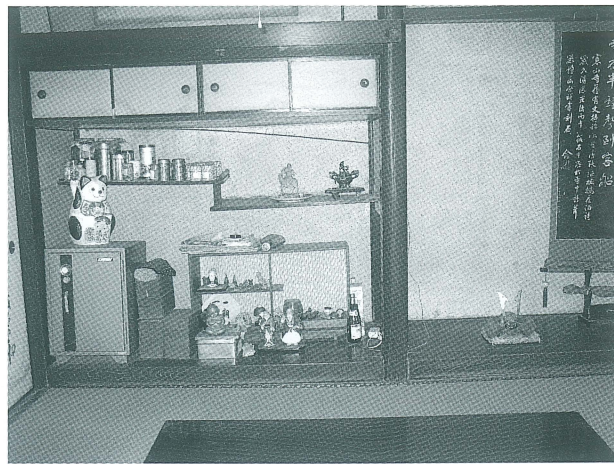


写真32 ザシキ床脇

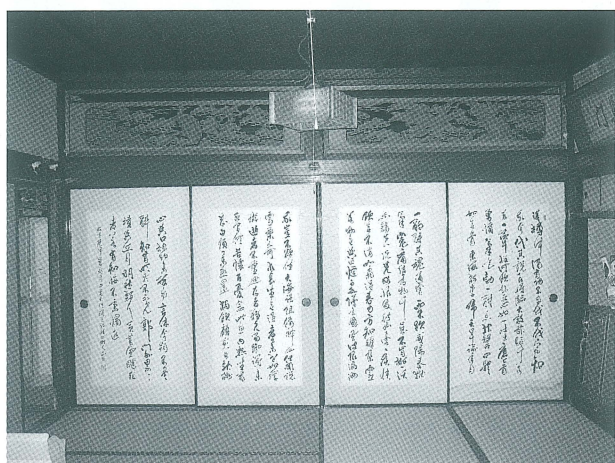


写真33 ザシキ南面



写真34 ザシキ東面と南面



写真35 ザシキ東面



写真36 ザシキ欄間



写真37 ザシキ床脇床下



写真38 コドモベヤ天井

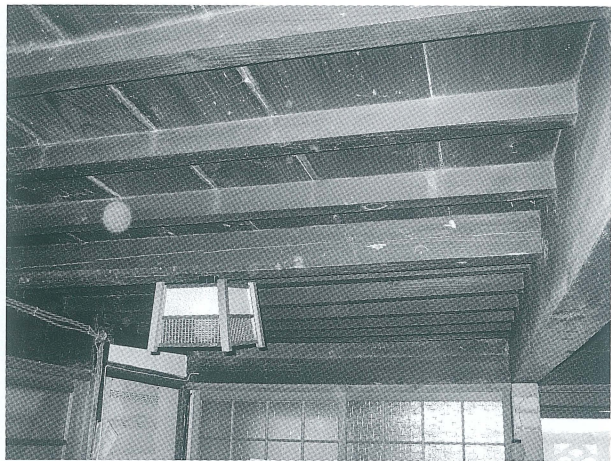


写真 39 イマ天井



写真 40 2階ニカイマ内部

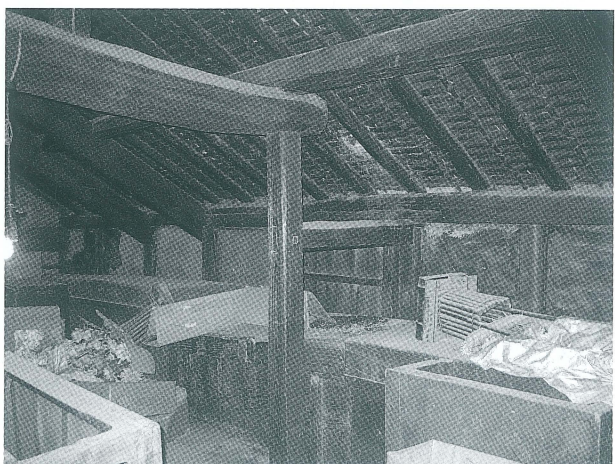


写真 41 2階モノオキ2内部

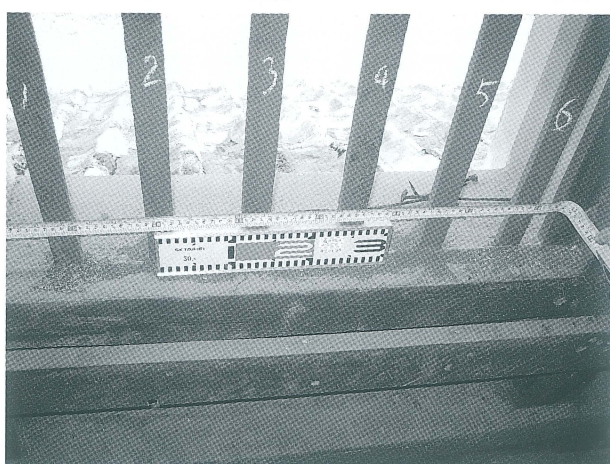


写真 42 2階モノオキ2窓 土戸を引き鉄格子を見る



写真 43 1階正面開口部



写真 44 2階中柱墨書

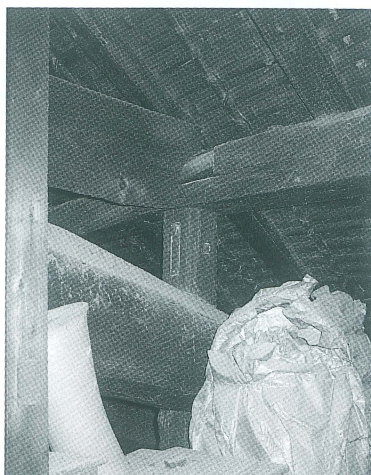


写真 45 十通り束に残る貫跡



写真 46 モノオキ2への梯子段



写真 47 離れ北面



写真 48 離れ西面



写真 49 離れ南面



写真 50 中庭

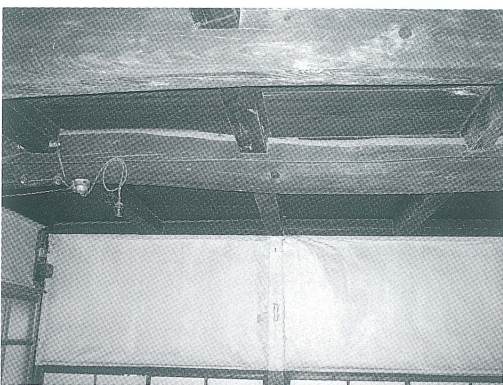


写真 51 離れ1階8帖和室の天井

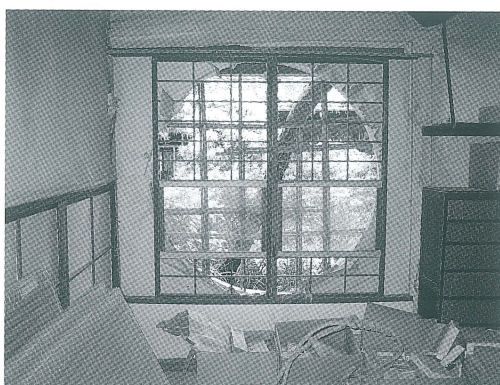


写真 52 離れ1階8帖和室の円窓



写真 53 離れ階段



写真 54 離れ2階回り縁

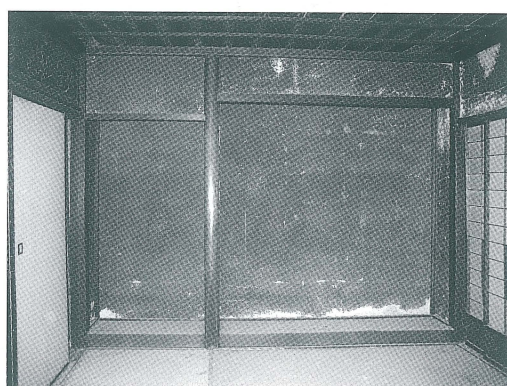


写真 55 離れ2階和室6帖の床の間と床脇

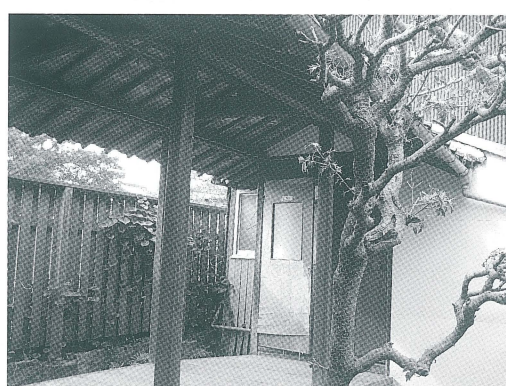
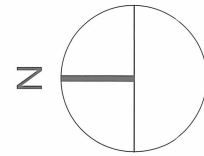
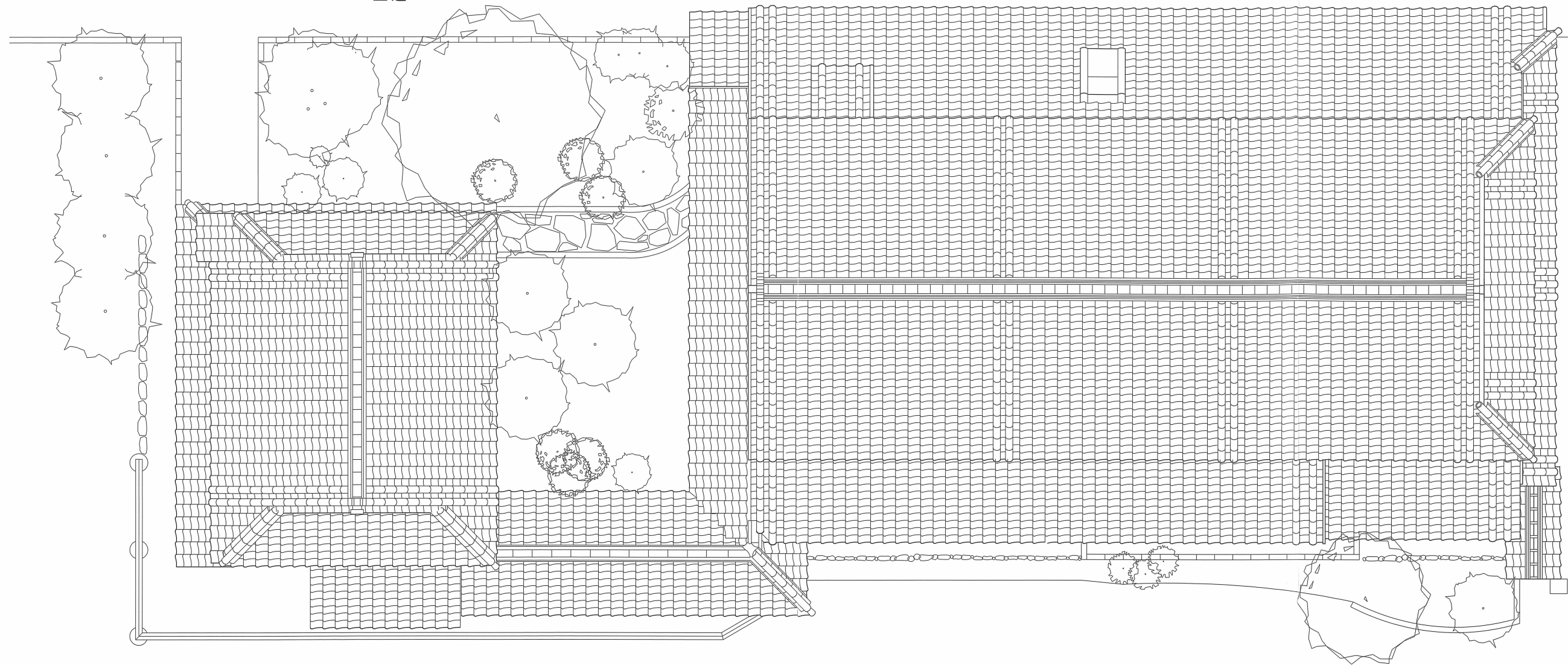


写真 56 渡り廊下

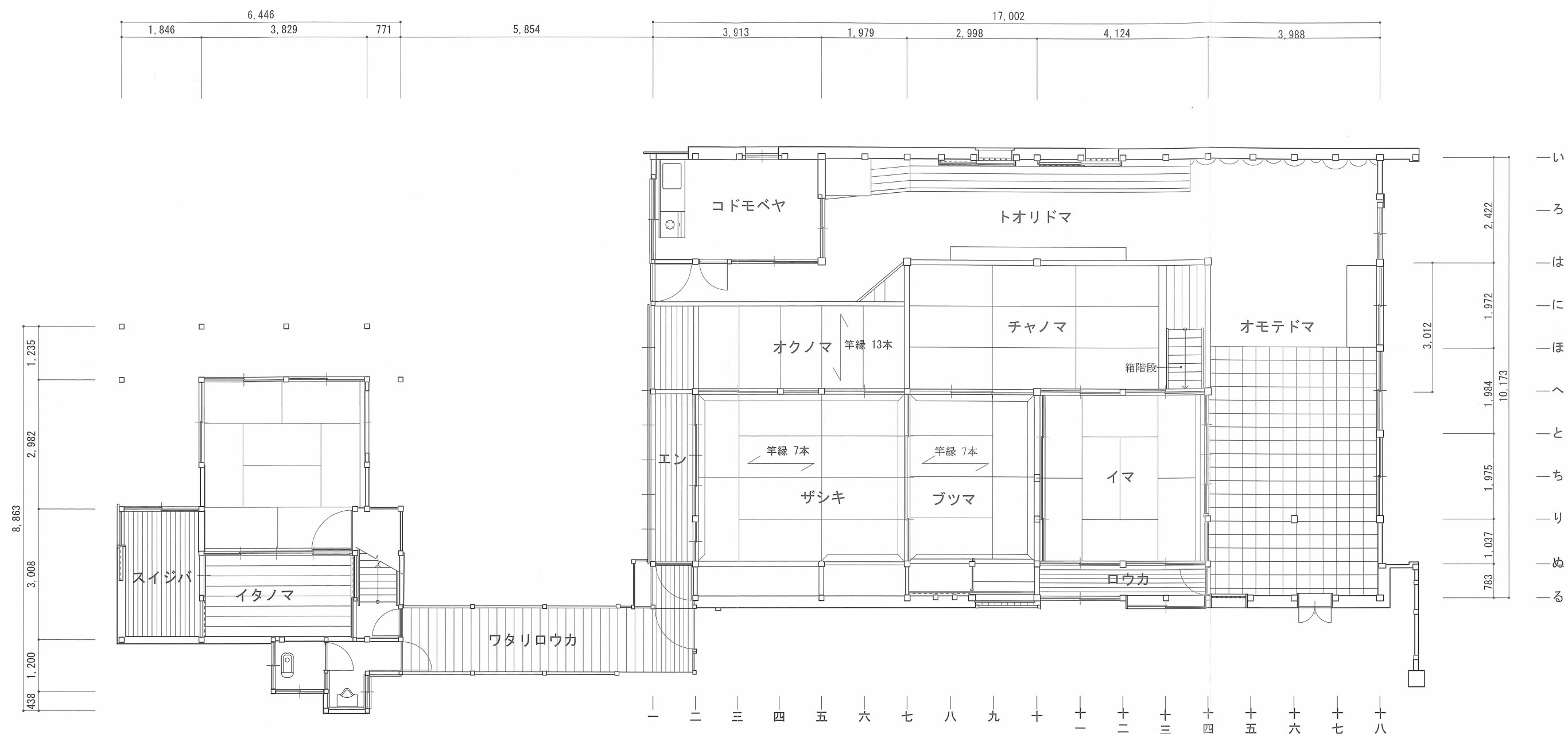


里道

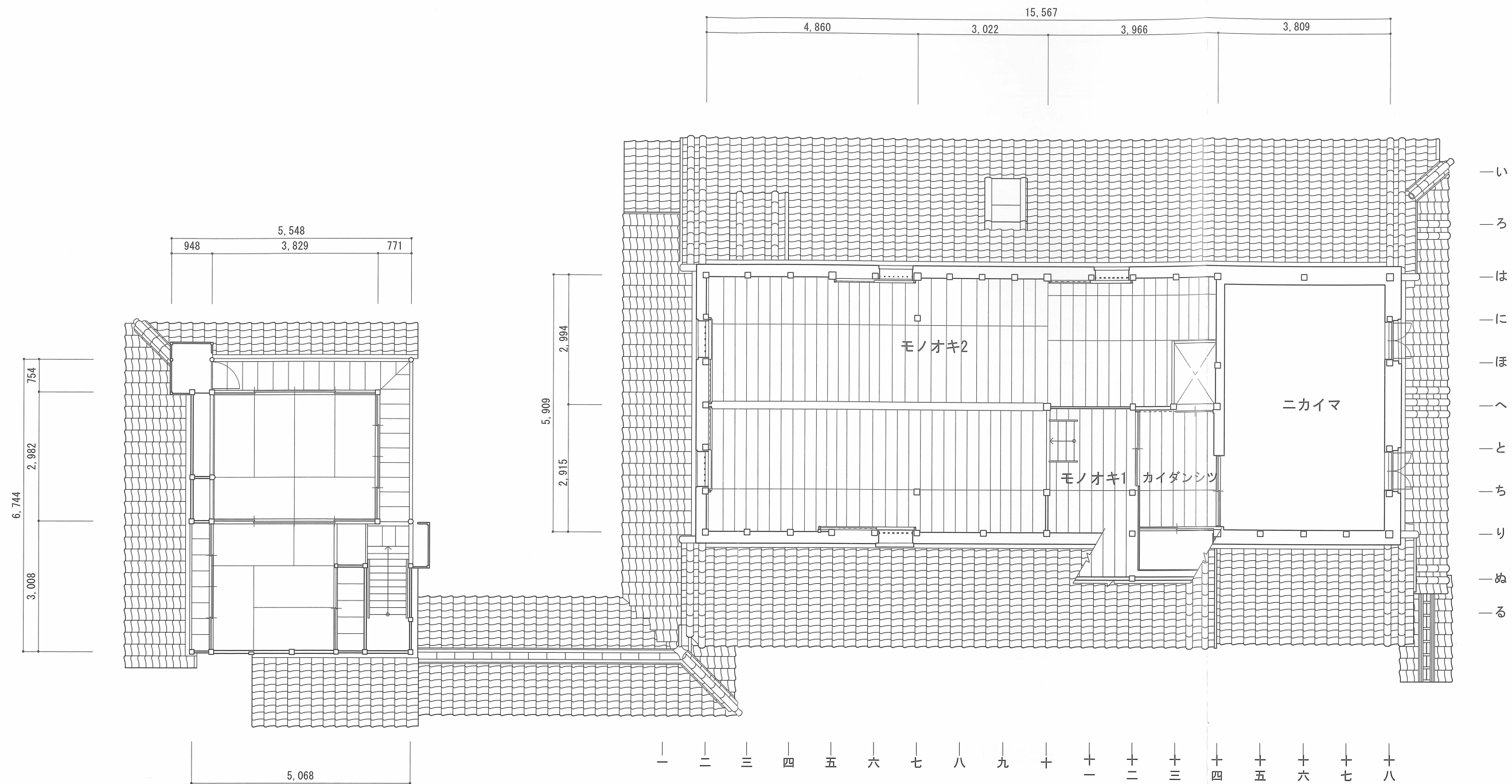


道路（旧往還道）

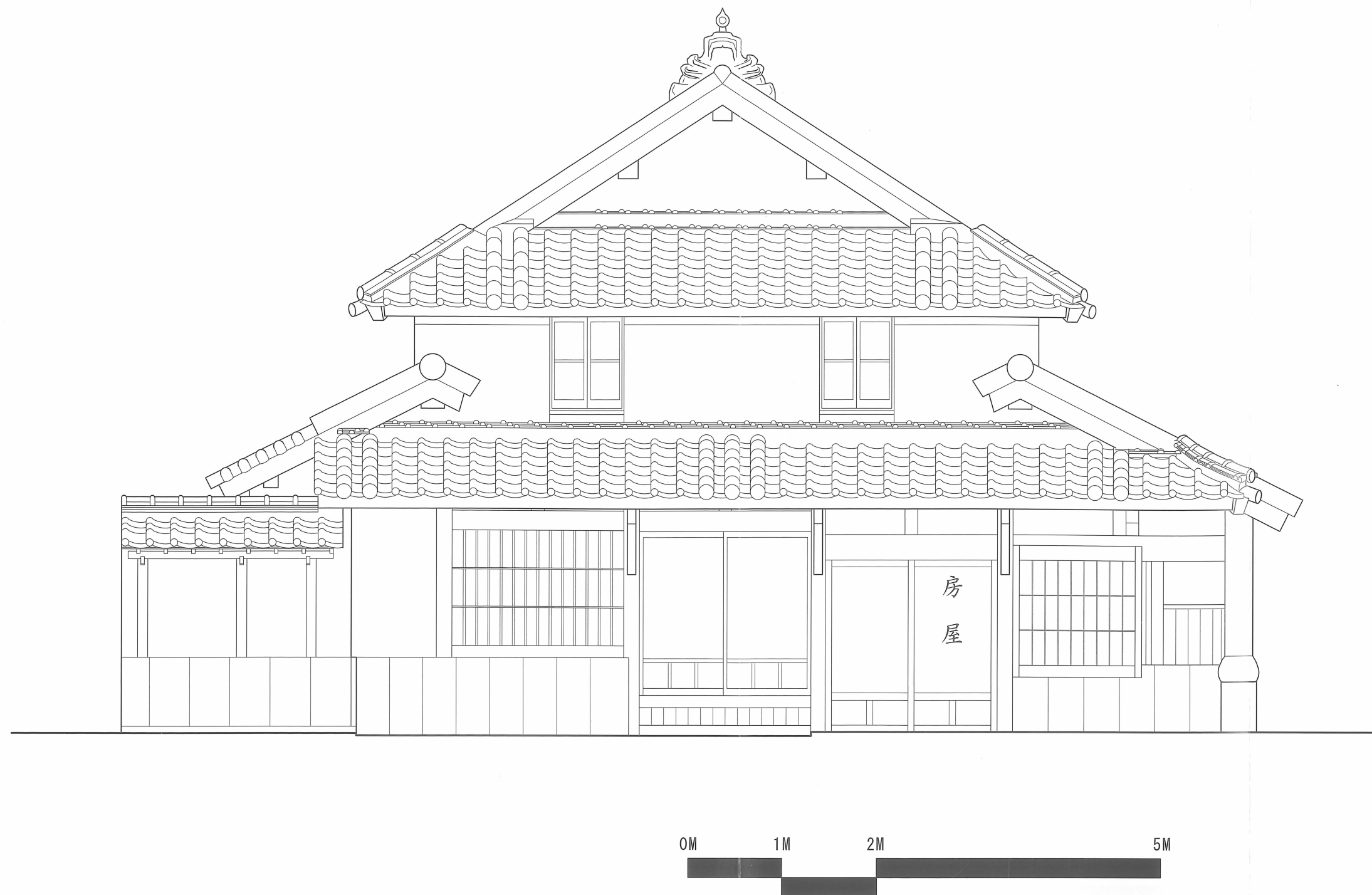




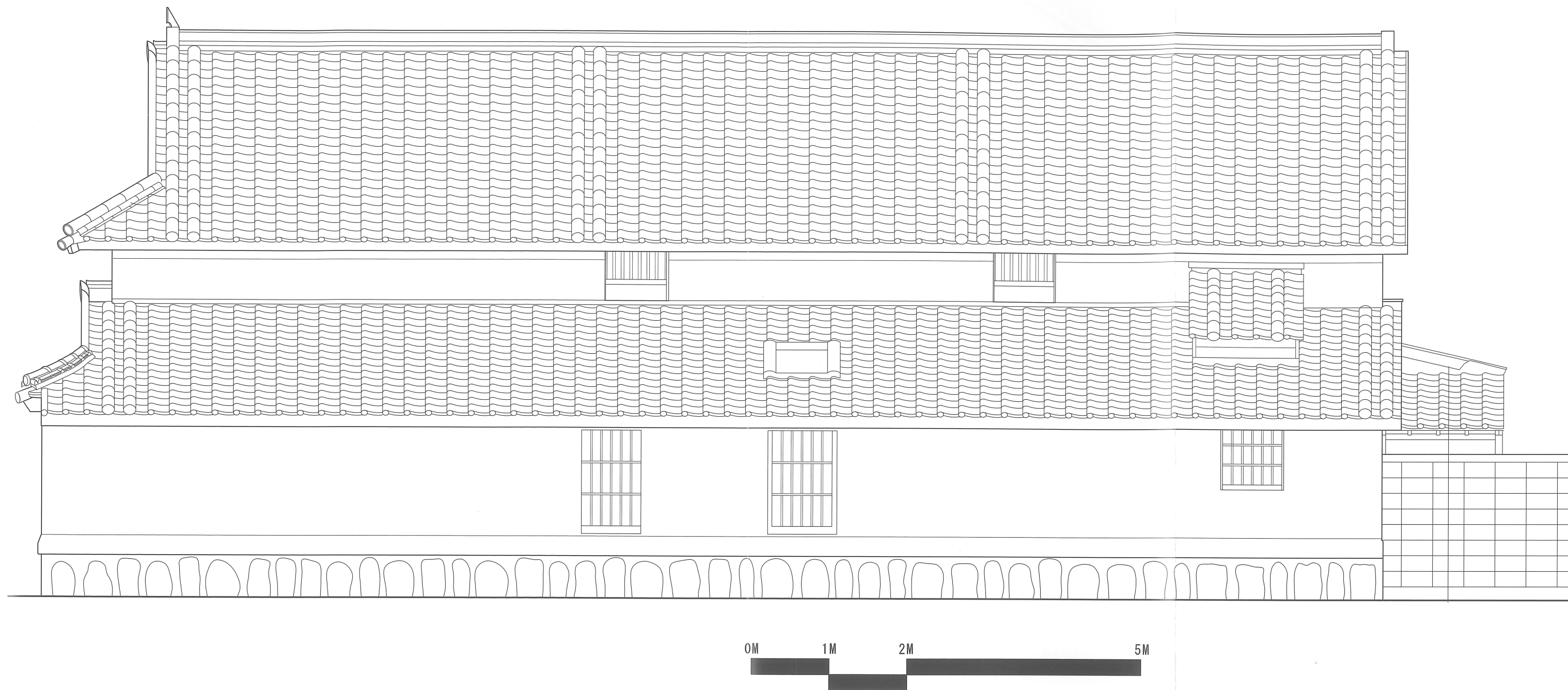
図面2 現況1階平面図 1/100



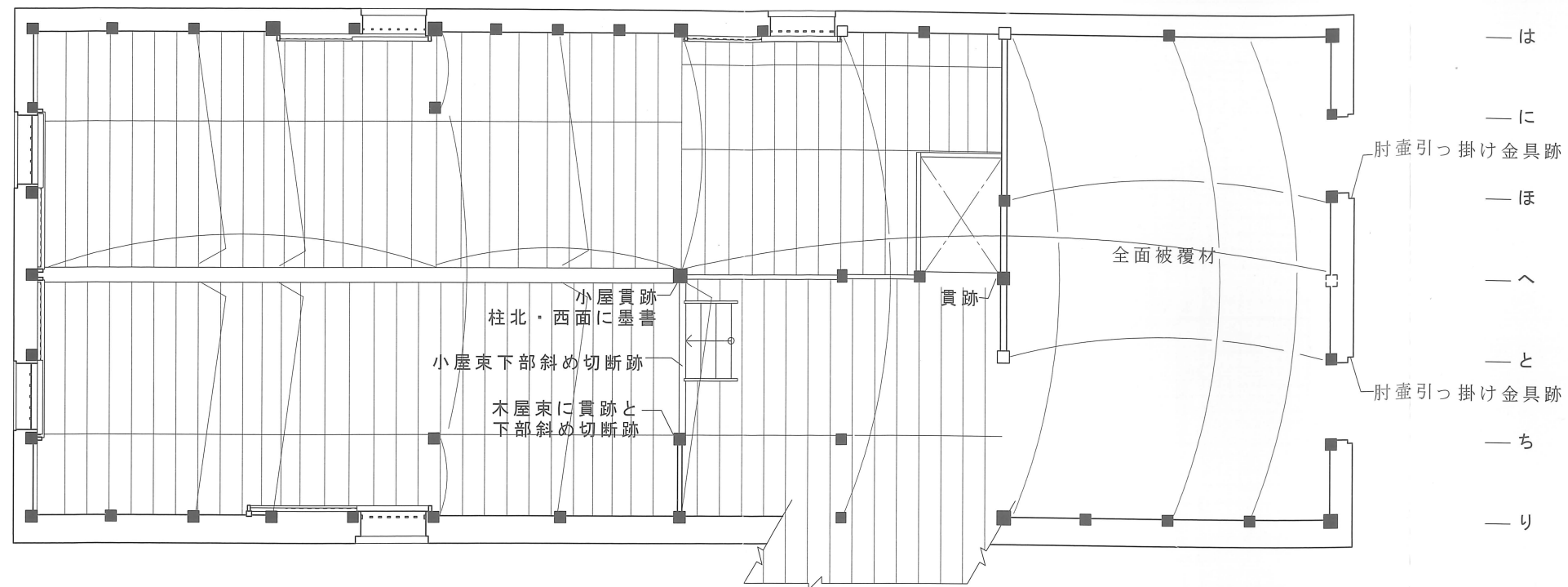
図面3 現況2階平面図 1/100



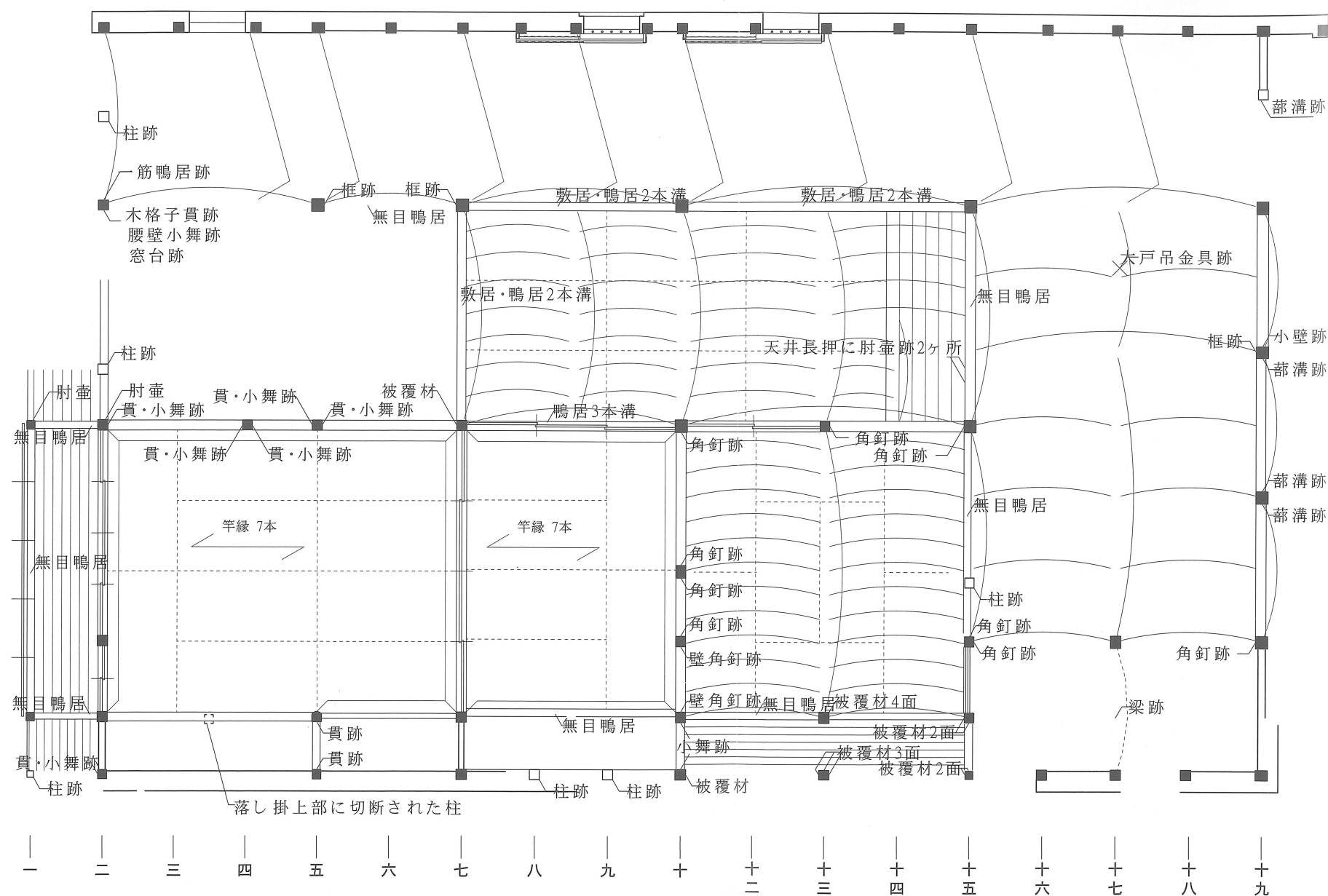
图面4 現況南側立面图 1/50



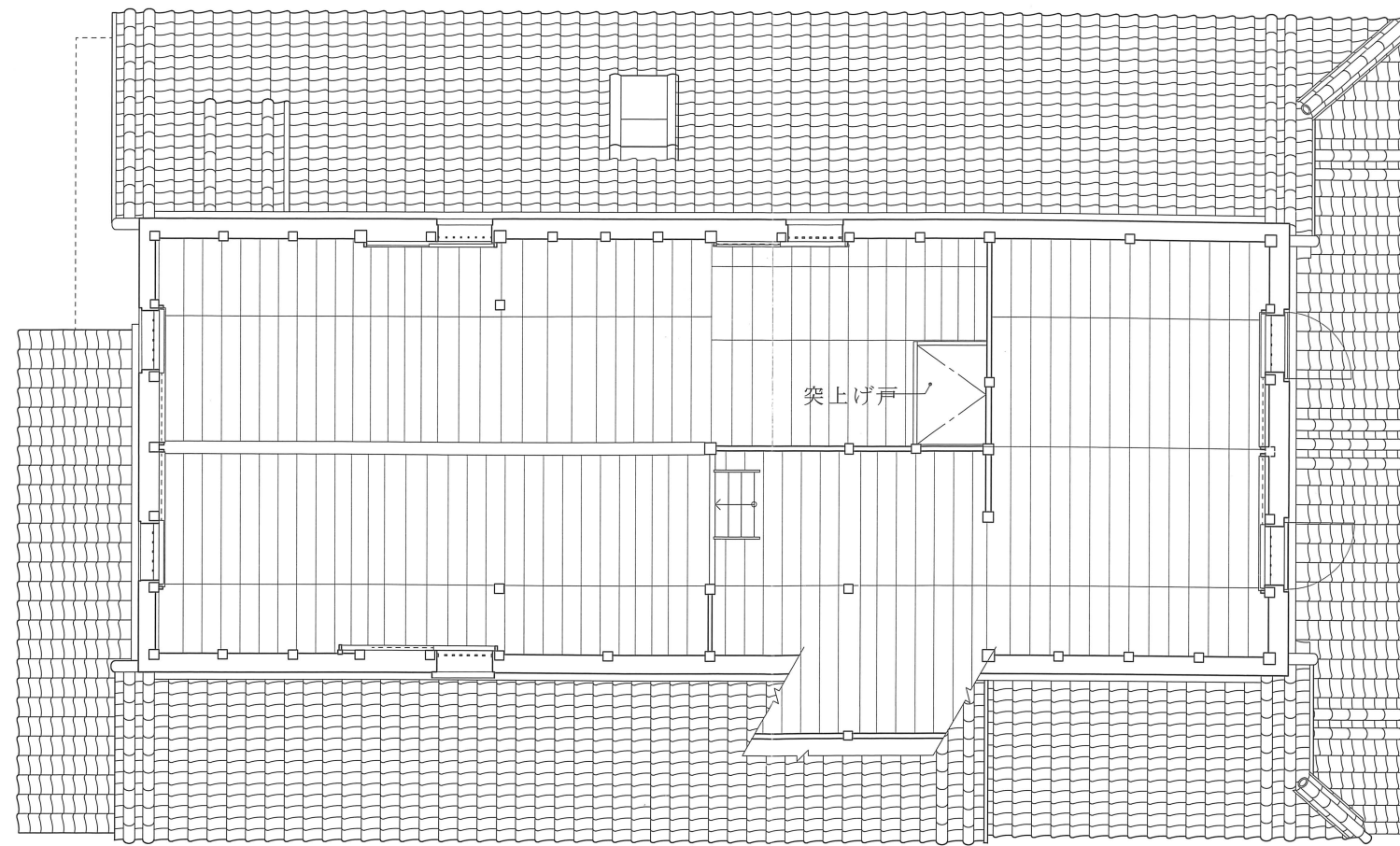
図面5 現況東側立面図 1/50



図面8 2階痕跡平面図 1/75

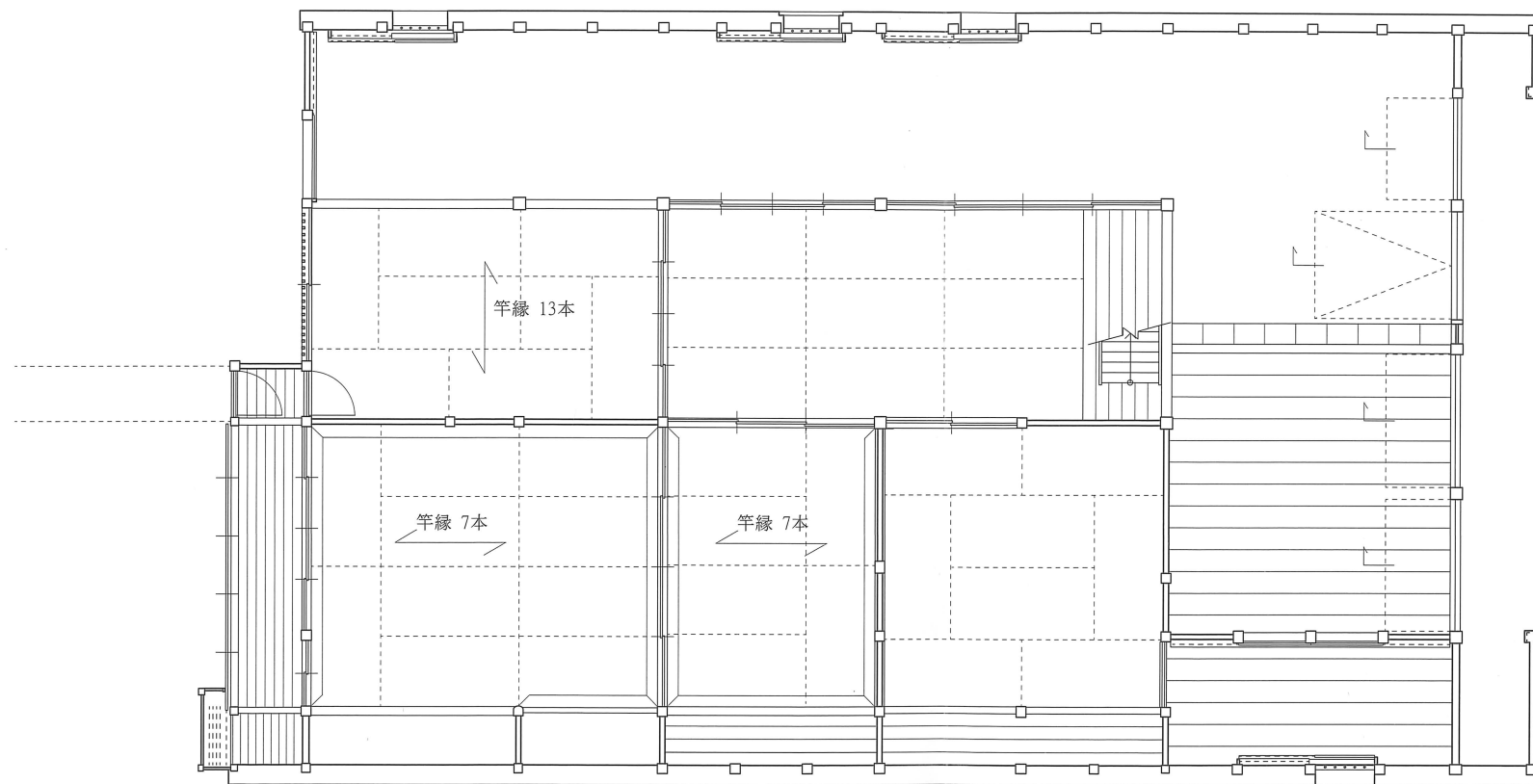


図面7 1階痕跡平面図 1/75



—い
—ろ
—は
—に
—ほ
—へ
—と
—ち
—り
—ぬ
—る

図面10 復原2階平面図 1/100



—い
—ろ
—は
—に
—ほ
—へ
—と
—ち
—り
—ぬ
—る

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八

図面9 復原1階平面図 1/100



図面11 復原南側立面図 1/50

■ 調査スタッフ

調査指導

宮本雅明 九州大学芸術工学研究院教授

調査担当

大森洋子 久留米工業大学建築・設備工学科教授

白瀬 亮 久留米工業大学大学院

沢津橋太一 久留米工業大学

永瀧義紀 久留米工業大学

山崎翔平 久留米工業大学

大森久司 大森設計室

古賀義朋 大森設計室

西原茂俊 大森設計室

中島孝行 中島アトリエ

中島 昌 大工

■ 八女市教育委員会

教育長 中島清志

生涯学習課課長 下川文比古

生涯学習課長補佐 古庄龍美

文化財係長 赤崎敏男

同係員 中川寿賀子

同係員 大塚恵治

今里家住宅調査報告書

福岡県八女市本町所在 今里家住宅調査報告書

2006年3月31日

[編集]

久留米工業大学建築・設備工学科 大森洋子

[発行]

八女市教育委員会

[印刷]

橋爪印刷

今里家住宅調査報告書正誤表

ページ	左右	行	正	誤
4	右	13	小山田	小和田
4	右	14	小山田	小和田
5	右	3		
5	右	8	オモテドマ	店の間
5	右	11	3間	6間
7	左	2	小山田	小和田
7	右	5	小山田	小和田
8	左	16	肘壺跡	肘坪跡
9	左	7	肘壺跡	肘坪跡
9	左	20	表の間	ミゼノマ